

緑丘を飛び出した「商大」

今や大学とは市民生活と隔絶した存在ではありません。周囲の社会と共存共栄していかなければならないのが現代の大学像なのです。その核として商大が重視するのは、大学と最も近い教育機関である高校との連携です。本当の商大の姿を高校生に理解してもらうため、そして商大への関心を一層掻き立てってもらうため、学内外で様々なプロジェクトが行われています。今回はその中心的なメンバーとして活動している江頭進先生に、商大の高大連携事業を紹介していただきます。

高大連携事業について

経済学科助教授 江頭 進

大学も高校も同じ高等教育機関でありながら、これまで両者の関係は入学試験を挟んであまり密接なものとは言えませんでした。しかし、日本の教育環境が大きく変わりつつある現在、両者の距離にも変化が見られます。少子化が進行し、各種学校の存続理由が危くなる一方で、社会が複雑化、専門化したことによって高等教育に求められる社会的役割はより高度なものとなりつつあります。

このような流れの中で、本学でも5年前より高校との連携を深めるための事業をおこなってきました。普段、特別な機会でもなければ大学教員と高校生が接する機会はほとんどありません。しかし、本学主催のオープンユニバーシティやオープンキャンパス、夏期連続講義では高校生たちと大学のスタッフがゆっくりと時間をかけて話し込む姿を見ることができます。大学のスタッフと高校生が向き合って語り合うこと、これこそが本学の高大連携事業の特徴なのです。

通常の高大連携事業は大学の教員が高校を訪問して1時間程度の模擬講義を行うか、あるいは受験志望者を集めた大学

説明会（オープンキャンパス）によっておこなわれることが多いようです。しかし、大学の宣伝の要素の強いこれらのイベントは、高校生たちに大学の「楽しい面」ばかりを強調する傾向があり、大学での勉強とは何かという点を十分に伝えられているとは言えません。一方、本学の高大連携は、高校生に社会科学教育を提供すること自体を主眼にしているため、供給側、需要側ともに「適度な」苦勞をすることになります。たとえば、昨年度より入試広報・高大連携部会は札幌市内の高校や本学札幌サテライトを用いて5日間計10時間の夏期連続講義を高校生向けに行っています。これは過去の出前講義などの経験から、1時間程度の講義では高校生たちに社会科学の面白さもそれを学ぶ意義も伝えられないという反省のもとに生み出された方法でした。これには、「偏差値的に入れる大学に入る」ということよりも「勉強したい分野のある大学に入る」という意識を受験生たちに持ってもらうという狙いもあります。

この意図は、平成17年に出版された「15才からの大学入門シリーズ」にも現れています。これは、『わかる経営学』、『美しい経済学』、『守る！企業法学』の3冊からなり、大学で学ぶ社会科学のさわりを分かりやすく解説したものです。



手稲高校夏期連続講義：江頭助教授の講義

手稲高校夏期連続講義
「携帯電話の新しいサービスを考える」